

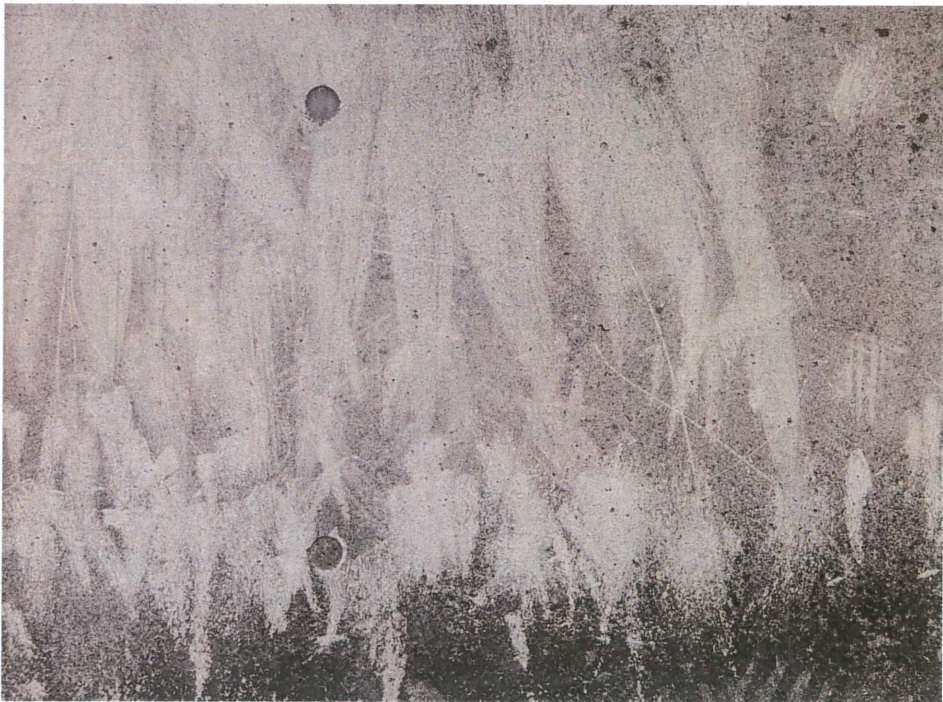
先駆 1974 年 12 月 20 日 第 3 種郵便認可
2021 年 8 月号
7 月 25 日発行(通巻 999 号)
毎月 1 回 25 日発行

月刊

先 駆

2021 年 8 月
999 号

- ◆ 自民一強体制の瓦解始まる—政権交代のチャンス
- ◆ 都議選結果を読む—「自民じゃない新しいもの」との選択
- ◆ 〈寄稿〉都議選小金井—漢人あきこ、“市民選挙”で勝ち取る



『先駆』1000号記念

『先駆』新聞形式から タブロイド判、雑誌へ

編集部

創刊から183号まで続いた機関紙『平和と社会主義』はA3サイズのタブロイド判でスタート、途中から一般商業紙と同様、活版組み版・輪転印刷機を用いる標準的なサイズのブランクセット判に拡充された経緯がある。後継の『先駆』も判型を何回か変更している。

戦後、政治諸党派の機関紙が政治新聞と呼ばれるように、赤旗をはじめ、全紙大の新聞紙形式が主流を占め、『先駆』も184号の改題以降、新聞形式を踏襲してきた。レーニンの『なにをなすべきか?』(全国的政治新

聞の創刊)が念頭にあり、「ブランクセット判はタブロイド判より一回り多い判型だから、やはり迫力が違う。70年安保・沖縄闘争の最中で、紙面構成や見出しの付け方は、当時の言葉で言えば『宣伝・煽動を効かせる』ことに重点が置かれた」(『先駆』5月号1000号記念)。

社会主義政治連合 結成と共同メディア

しかし70年代「安保・沖縄闘争の敗北、80年代、日本経済の高度成長と社会主義勢力の後退、東欧市民革命の勝利とソ連

邦の崩壊という事態の中で社会主義を掲げる諸勢力は戦後革新プロックの分裂・衰退という戦後史の大転換の渦中に立たされ、新たな社会主義的潮流の形成をどう展望するかという局面を迎えた。フロントは80年代後半から、こうした問題意識をもとに、新たな社会主義的潮流の形成を提唱、1987年1月の第14回大会で日本共産主義革命党からフロント(社会主義同盟

その後、この政治連合構想は人民の力派、第四インターナショナル日本支部、共労党、フロント・プロレタリア派などの政治グループや関生グループ、東部労組などが参加する相談会、懇談会などの準備活動を経て、92年8月、「自治・連帯・共生の社会主義をめざす政治連合」として正式発足する。この準備活動の段階からフロントは政治連合の共同事業として「共同メディア」の発行を強く提唱、この政治主張を裏付けるため、「機関紙『先駆』の廃刊、制作スタッフを提供する用意がある」

との立場を公表した。「大きな時代の転換期にあつて、自治・連帯・共生の社会主義の旗を掲げ、社会主義の再生をめざす政治主体の形成が求められており、われわれは政治連合を通じて新左翼運動の歴史を決算し、新しい道に踏み出す」との政治

決断だった。

80年代末から90年代にかけてパソコン、ワープロ技術の革新が進み、パソコン上で紙面編集・制作が可能な電算写植が出現、これまで活版組み版、輪転機印刷が主流だった機関紙製作に革命的变化が起こった。この

システムを取り入れると、年間約300万円の新聞製作コストが、ワープロ入力、コンピュータ編集を自力で行い、経費をほぼ半額程度に縮減可能となる。

このシステムを紹介してくれたのが、江ノ電沿線新聞の村上欽也さんだ(別掲)。共同メディアもこのシステムを使えば相当安価に導入が可能となる。まず手始めに『先駆』制作に

このシステムを導入、紙面制作を大幅に変更した。90年9月10日付の『先駆』617号から従来のブランクセット版からA3タブロイド判に変更、イメージを大きく変えた。当時の組織内文書によると、「9月より新紙面に移行した。新しい先駆は組織の内外で好評であり、基本的には成功だったと評価できる」、

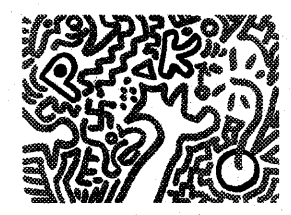
「今回、新システムを導入したが、そのもつとも大きな狙いはワープロ入力から版下製作(電算出力)まで自力で行うことによつて、製作費を大幅に削減することができることである。さらにこれは『団結』や他の出版物にもあてはまる。この編集技術とソフトは様々な応用可能である点が魅力である」と絶賛。

『先駆』廃刊方針を 撤回、雑誌『先駆』へ

タブロイド判への移行後2年、政治連合の正式スタートが本決まりとなり、92年7月、共



特集 自衛隊問題を考える
連載 社会主義を考える



The Front-League For Socialism, Japan
フロント (社会主義同盟)

の主体的な推進力として『先駆』を継続することが可能であることから、『先駆』雑誌化方針が採択され、雑誌月刊『先駆』に移行する。タプロイド版は1992年5月25日の653号まで続き、同年6月からB5判の月刊誌に変更、現在の月刊『先駆』として定着する。タプロイド版は4ページ建てだが、雑誌形式になると654号が28ページとページ数の増減が容易となり、誌面編集の幅が広がった。

今から思えば、村上さんの先験的努力がなければ『先駆』の雑誌化も『Opia』の自力発行も相当遅れたことになる。さらに95年には市民の政治新聞『ACT』へと広がった。これと並行して左翼グループが村上さんの主導でこの電算システムを導入、誌面のビジュアル化や内製化が可能となり、併せて機関紙誌発行のコスト低減に大きく寄与。感謝に堪えない。

折があった。フロント派内では政治連合共同メディア発刊と『先駆』廃刊方針に反対意見が噴き出、

この活版システムへの導入には、設備費と人件費がかかりすぎるという大問題があります。写植は、写真技術の応用。作業者が一文字ずつ入力して印刷紙に文字を印字することで組版

美しい文字の流れ

江ノ電沿線新聞 村上 欽也

印刷システムの歴史

同メディア『Opia』創刊準備号が発刊され、タプロイド判『先駆』で蓄積した編集技術とスタッフを活用、仙台のさつき印刷の協力で『Opia』発行を軌道に乗せる。当時の組織内文書では「政治連合は独自の準機関紙『Opia』を発行することでその政治的意思を表現することに成功した。機関紙の発行はフロントの『先駆』を雑誌化することで、発行体制を保障し、人的・製作基盤を提供することで実現したものだ。その意味で同盟が政治連合結成

安藤紀典さんが『先駆』の編集長になった1978年頃、日本の主な印刷システムは、文選と文字入力を柱に大きく分ける

と①活版、②写植(電算写植を含む)、③DTPの三つでした。活版は幕末からの印刷技術で、「活字」を一文字ずつ拾い、組み合わせられた版にインクを付け、紙にインキを転写します。

を行い、印字された文字や表組を現像した印刷紙をイラストなどと貼込んで組版し、製版(写真とともに実際は専門業者に発注)、印刷する。

雑誌・カタログなどの複数ページの印刷物のレイアウトには欠かせないソフトウェアのことで、1990年代後半のウインドウズ95から本格的に使用されるようになり、パソコン上で印刷物のデータを制作することから「机上出版」と呼ばれた。

の分解、デザインの制作から、グラフィックを、しかもカラーで編集が一人で行えるようになったことで、編集業務は一変し、共同作業も自在となった。つまり、例え、文選速度がさほど変わらなくとも、文選、レイアウト、図形、写真からカラー出力まで、一つのプラットフォーム上で扱うことができ、その総合

手動写植機の操作は、和文タイプの長い歴史があり導入は容易だが、写植機の導入費用が400万〜800万円と高く、かつ、生産性もワープロやパソコン入力と比較してやや劣る点に問題があります。

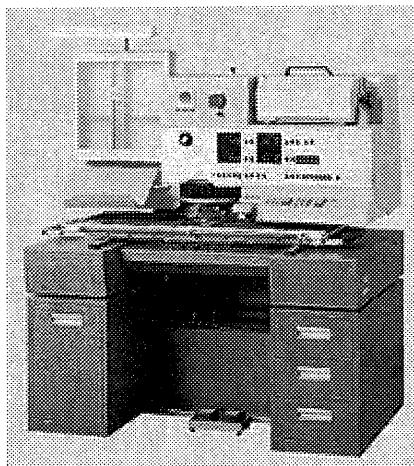
DTPはパソコン上で、割付け、文字入力、イラスト、写真

力は魅力的である。プラットフォーム
マイクロプロセッサが71年11月にインテルから発表された当時、またM社の開発部において米電気通信学会などいくつかの専門誌を眺めていただけでなく、私自身がミニコンを利用した自動交換機のプログラムの設計に携わっており、コンピュータやITの世界が急速に変わりつつあることは知っていた。

DTPとは、デスクトップパブリッシングの略で、新聞や「ページもの」と呼ばれる書籍

に至るまでは紆余曲

東京の業界の目は、進んだアップル社と後を追うマイクロソフト社のプラットフォームの競争に注がれていた。



年	記事
1972	インテルが8ビットのマイクロプロセッサ i8008 を発売
1975	ビルゲイツがマイクロソフト (MS) を設立
1976	NECがマイコンTK-80 を発売
1977	アップルがパソコンPC-2 を発売
1979	NECがパソコンPC-8001 を発売
1981	MSからPC各社にMS-DOSを提供
1985	windows1.0は、MSが1985年11月に発売したMS-DOS上に動作するOS環境
1985	アップルがページレイアウトソフト「ページメーカー」を発売
1992	windows3.1は、1992年4月にリリース。16ビットのOS環境
1995	95年末にMSがwindows95を発売
1997	97年6月、住友金属がエディカラーを発売。縦組、表組、Macと互換性あり

プラットフォームとは、機器やソフトウェアの動作に必要な基

盤となる装置やオペレーション(OS)のことを言う。

後を追うマイクロソフト社は81年、MS-DOSを共同開発したIBM以外のメーカーへのOEM供給を主張した結果、IBMはリスク軽減のために買い取りを避け、使用料を支払うライセンス契約とした。

この自由なOEM供給を認めたことが後のマイクロソフト躍進の原動力となり、MS-DOSのデファクト・スタンダード化(事実上の世界標準)を決定づけたと云えよう。

アートで電算 写植を習う

81年にマイクロソフトのDOSに軍配は上がったが、DOSの上に乗るページレイアウトソフトの姿はまだなかった。そこで、89年夏に(株)アート出力センターの斉藤さんから電算写植を毎日午前中の2時間習うことに

決心。

当時、小型の手动写植機が文字盤を含めて約400万円。これに対してパソコンとDOSで働く編集ソフト(スーザンとソフィア)及びパソコン通信ソフト、ファクス等で150万円。要は借金して、5年で返すことにして、アートに通う。

もう一台のパソコン一式は、江ノ電沿線新聞の吉田社長に100万円出してもらい、新聞社の一室に設置する。

90年1月から3月までで訓練は終り、仕事の受注を開始。最初の仕事は(株)鎌倉ケーブルテレビの20余人分の社員章だった。2カ所目の受注は、アート写植の「20周年記念史」の編集・制作で、おおよそ1カ月を要したが、65万円を売り上げた。

秋には「アートの広場」(神奈川県下の印刷会社、制作会社数百社に配布する月間情報誌、月8万円受注)の編集・制作。

『先駆社』に売り込み

運動圏でなくてはならない日常活動の一つに機関紙誌の発行がある。月2回、部数千部程度だと、専従費、印刷費、発送費の合計は月約35万円となる。

もし、現行の活版印刷を電算写植に変え、文字はパソコンで入力することにすれば、月10万円は機関紙誌の発行費が少なくできる。みんなが原稿をパソコンやワープロで作成して、メールで編集部にテキストデータで送るようになれば、編集部の労力を軽くすることもできる。出力センターは神田に数軒ある。

90年秋、この電算写植提案を先駆社で山田・奥脇両氏にしたところ、直ちに「やりましょう」と言う返事が返ってきた。

そして、電算写植の伝授を始めて1年半後の92年4月に山田、奥脇、村上が出資して制作会社(有)ル・パピエを設立し、

協力体制が東京にできた。

電算写植と

エディカラー

電算写植は先駆社に続いて、工人社の石井さんに教え、さらに人民新報にも話したように思う。

ル・パピエを設立して6年後の97年6月、ついに本格的な組版ソフト、エディカラー(EDI)が使えることになった。

早くに導入した団体は、先駆社、工人社、労働情報、アエラ(朝日新聞社)、横浜市、あかつき印刷(共産党)、江ノ電沿線新聞社などである。

EDIの開発は住金で、販売はキャンノン。最初の売値は100万円を超えていた。あまり売れなかったのが10万円余まで値下げしたが伸びなかった。後発のイン・デザインは3万円以下であった。明らかに大企業による販売戦略の大失敗だった。